

talk! talk! talk! アーティスト・喜多郎さん



アーティスト 喜多郎さん

代表作「シルクロード」をはじめ、数多くの感動的な名曲を産み出してきたアーティストの喜多郎さん。常に世界中のファンを魅了し続け、世界でもっとも高い評価を受けている日本人アーティストと言っても過言ではないだろう。そんな喜多郎さんが、米国コロラド州に移住し、その素晴らしい大自然に感化されて手にしたのがカメラだ。目の前にある美しい風景にカメラを向けること、それは今や生活の一部になっているという。そんな喜多郎さんにとって、カメラとは、写真とはいったいなんなのか？今回はコロラドでの生活の話、ツアーの秘話などを交えつつ、その思いをたっぷり語っていただいた。

プロフィール

喜多郎。1953年、愛知県生まれ。1970年代初め、「ファー・イースト・ファミリー・バンド」に参加、国内はもとより欧米各国でも高い評価を獲得する。グループ解散後の1978年、「天界」にてソロ・デビュー。1980年、NHKの人気ドキュメンタリー番組「シルクロード」のテーマ・ソングを担当し、大反響を巻き起こす。そして、同年発表されたアルバム「シルクロード・絲綢之路」でその名を世界に広く知られるようになる。1986年、アメリカのゲフィン・レコードと全世界独占契約を結び、「天空」を発表。その後、日本人初の全米ツアーを行い、多くの都市でソールドアウトを記録し大成功を収め、1990年発表の「古事記」でビルボード誌ニューエイジ・アルバム部門において8週連続第1位という大記録を打ち立て人気を不動のものとする。同年、米国コロラド州に移住する。その後の数多くの楽曲を発表、6度のグラミー賞のノミネートを経て、2001年2月、アルバム「Thinking of you」で第43回グラミー賞最優秀ニューエイジ・アルバム賞を受賞する。現在もコロラドを拠点に積極的に活動を行っている。メロディの美しさ、独創的でイマジネイティブなサウンドは世界中の多くの人々に親しまれ、日本、アメリカなど毎年世界中でコンサートを行いその美しい音色でファンを魅了し続けている。2005年2月には、四国遍路八十八ヶ所を周りそのお寺の鐘の音色を使って楽曲を作るプロジェクトの第2弾アルバム、「空海の旅2」が発売される。また、喜多郎さんの原点とも言うべき番組「シルクロード」が新たに生まれ変わり2005年1月1日から1ヶ月に1回放送される。1980年当時の映像も盛り込まれるそうだ。

CDでは味わえないライブ感 観客と一緒にパワーを出し合う場

2004年はアジアツアーを行ったそうですね。

ええ、東南アジアあたりに行ったのは7、8年ぶりで結構間隔が開いていたのでどうかなあと思ったんですけどね、観客の反応もとてもよかったですよ。曲が終わると会場全体がドーンと湧くあの感覚がね、非常に素晴らしい。全員立って祝福してくれるんですよ。もうずっと拍手が鳴り止まないというような。これはね、やっているとすごく気持ちが良い、やっているとというような気持ちになる瞬間ですね。

アジアの方は日本も含めて反応が大人しいようなイメージでしたが、ストレートに感情表現をされるんですね。

日本は拍手が長く続く感じで、スタンディングオベーションっていうのは少ないですよ。でもアジアは一斉にわーっと来ますからね。マレーシアのゲンティイという会場でやったときの盛り上がりなんて凄かったですよ。6千人ぐらいいる会場だったんですけど、街から車で奥まで入って、さらにロープウェイで登ったリゾート地みたいなところにあるんです。よく6千人もここまで来たなという感じで、待ちに待った状態ですから、僕たちが舞台上上がった時点ですでに盛り上がりは最高潮なんです（笑）。

すでに（笑）。

だから、そこから静かにしてもらおうのが大変でしたよ。静寂から、静かに曲がすーっと始まっていくというものだったので、盛り上がりも鎮めないでコンサートが始まらないんですよ。

喜多郎さんの楽曲というと、そういった静かで神秘的な曲のイメージがありますが、ライブもおごそかな感じなのでしょうか？

いえ、結構わーっと盛り上がりますよ。僕のコンサートはCDのイメージとはまったく違うんです。CDを聞いている人が初めて僕のライブを見たら、「えっ」と驚くんじゃないかな。シンセサイザーというイメージがあるかもしれないですけど、ギター弾いたり、太鼓をダンダン叩いたりして、アレンジをライブ用に変えているんです。CDはCDでひとつの作品ですが、ライブにはCDとは違うライブ感というものが、CDと違うものを聴くことができるのがライブの良さだと思っていますから、CDも聴いて欲しいし、ライブはまた違うものとして盛り上がり見てもらいたいと思ってやっていますよ。

さらにその時間を喜多郎さんと共有できているということが、観客にとってはうれしいことですよ。

演奏していても、今観客と一緒に、この場所でパワーを出し合っているというのは僕も感じる時がありますよ。舞台のうえで、観客からの凄いやりのパワフルな反応を感じるんです。おお、これは負けちゃいけないぞっていう。その共鳴がライブの楽しさ、醍醐味ですよ。



D70を手にして デジタルカメラの可能性に期待

アジアだけでなく、アメリカ、ヨーロッパなど各地を回っていますが、そういうときにカメラをお持ちになったりされているのでしょうか。

ええ、持って行きますよ。移動が多いので自分の自由時間というのはなかなか取れないんですけどね、でもなんとか時間を作っては撮っています。テーマはいつも自然。その土地土地の風景を撮影することが多いんです。でも最近ね、そろそろ人も撮ってみようかなって思っているんですよ。いろいろな人との出会いがありますからね、そういう人たちを撮ってみようかな。

今回のアジアツアーでも写真を撮られたんですか？

アジアにはD70を持って行ったんですが、手に入れてからD70でじっくり撮影する機会がなかなか作れなくて、慣れてないからうまく使いこなせなかったん



です。さらに台風に見舞われてしまって天気もずっとよくなかったですから、撮る機会にも恵まれなかったんです。しかもね、D70のレンズを1本しか持っていかなかったんで、いろいろな被写体を撮りたいと思うとやっぱり違う他のレンズが欲しくなってきたりして。だから次のツアーでは、レンズをもう少し持って行ってこのカメラで撮りたいですね。

まだ慣れていっしょらないということですが、D70の使い心地はいかがですか？

まだD70初心者ですからね、やはり操作は慣れるまでは難しいですね。でもカメラ本体は非常に使いやすいと思います。撮っていてもタイムラグみたいなものはまったく感じないですね。だから、これから時間をかけてじっくり慣れていきたいです。レンズも変えてみれば自分の中のイメージだとか構図だとかも変わっていくと思いますし、楽しみです。

喜多郎さんが今カメラに求めるものとはなんですか？

今はね、デジタルカメラの面白さ、可能性というものを強く感じているんです。この先どんどんテクノロジーが発達して行って、ますますデジタルの処理能力が優れていくことは確実ですから、そうするとフィルムとはまったく違う、フィルム以上の面白さも望めるのではないかなと思うんですよ。デジタルにはないフィルムの良さというものも言われていますけど、それはもちろん僕もそう思うしこれからも使い分けていきたいとは思っています。でも今は、まだまだ初心者ですしわからないことも多いんですが、デジタルカメラの良さというものを少しずつ学んでいきたいと思っています。

8月28日に行われた長良川コンサートの様子



ステージの設置風景



ステージからの眺め

標高2800m、熊やシカの住む所 被写体は我が家の大自然

そもそも、カメラを始めるようになったきっかけはというのはなんですか？

14年前からアメリカのコロラド州に住んでいるんです。ボルダーという町の近郊にある小さな町で、ロッキー山脈の裾野にありまして標高が2800mぐらいなんです。日本で言うと北アルプスだとか南アルプスだとかの頂上に住んでいるようなものですね。5月の終わりがらまで雪が残っていて、9月にはもう次の冬が来るようなところなんです。そこにスタジオを建てて、1年の半分ぐらいはそこに居るんです。本当に厳しいところなんですけど、ロッキー山脈の大自然というのはそれは綺麗で大きくて。僕はだから、それに触発されて写真を撮っているんですよ。

ご自宅付近で撮影することが多いのですか？

いや、もう家の敷地内で撮るのがほとんどなんです。撮影は生活密着型、時間を作ってどこかに撮りに行くというのはあまりしないんです。作曲をしていて、ふとスタジオから表に出てみたらぱっと美しい夕焼けが広がっていたりすると、そのままグッと走ってカメラを持って来て一番いい場所を探して撮ったり、そんな感じです。それに敷地内といっても結構広いですからね、ちょっと散歩するといろいろいい被写体にも出会えるんです。

かなり大きな敷地だそうですね。

うーん...10万坪ぐらいはあるんじゃないかなあ。山奥ですから誰も人なんて入ってこないし、来るのは熊ぐらい(笑)。あとはエルク(ワピチ)だとかムース(ヘラジカ)、コヨーテだとかね。

エルク？

オオジカです。トナカイよりもさらに大きな角を持っていてね、結構大きいですよ。ムースはそれよりもさらに大きくて、見るとその大きさに驚きますよ。敷地内に小さな湖があって水飲み場になっているんでしょうね。そこにいるといろいろな動物が入れかわり来るんですよ。1日中見ている飽きないですね。そういう動物も遠くから長いレンズ使って撮ったりしていますよ。さすがに熊は恐いのでまだ撮ってないんですけどね。

曲を作ることは生活の一部、写真を撮ることは毎日のリズム

ご自宅にそれだけの素晴らしい大自然、被写体が広がっているというのは凄い環境ですよね。

そうですね、普通、撮りに行くかと思ってなかなか撮れるものではないでしょうね。東京にいたらたぶん無理でしょう(笑)。僕もこんなに高い山奥に住むとは思っていなかったんですけど、たまたまこの土地と出会ってしまったんですよ。昔、この辺りはネイティブアメリカンの聖地だったんです。そういう意味でこの土地からネイティブアメリカンのスピリットみたいなものを感じられるといいと思って。でも、テレビも新聞も何もない所ですから、生活するには厳しいですよ。でもその反面、そこの空気には透明感みたいなものがあるって、静寂があって、研ぎ澄まされている感じがするんです。この環境が曲を作る上でプラスになっていると思うんですよ。都会でも楽曲はできるとは思うんですが、何かひとつ、要素が足りないような、物足りないようなものになってしまうんじゃないかと思えます。

では創作活動は主にコロラドで？

そうですね。スタジオを建てているので、楽曲制作はほとんどそこでやります。コロラドにいるときは、朝から晩までスタジオにすることが多いです。毎日曲ができていくことはありません。大体、構想が決まってから1週間から10日ぐらいかけて1曲を作り上げるんです。出来上がるとまた準備期間があって、アイデアを出しながら構想を練る。構想が決まったらまた作る。毎日、毎日、そういうことを積み重ねながら暮らしています。

毎日制作をされているんですか？

僕ね、休むことってできないんですよ。それが困ったところでもあるんですけどね、今日から1ヶ月休みだからなんにもしないで、自分でラインを弾いて決めてしまえばいいんだけど、それがなかなかできないんですよ。いつでも曲のことを考えてしまったり、どんなことでも制作につながっていくんですよ。30年音楽を作りながら生活してきていますからね、それが当たり前になってしまったというか、それが普通の生活なんです。まあ要するに貧乏性なんじゃないかな(笑)。

先ほど、写真を撮るのも生活密着型だとおっしゃっていましたが。

そうですね。メインは作曲、でもその合間に写真を撮るというのも普通の僕のリズムの中にあることなんです。曲を作ることも写真を撮ることも生活の一部なんです。写真は特に、その生活リズムとタイミングが重要だと思います。夕焼けだってもし気づくに5分、10分遅れていたら出会えなかった訳ですから、その景色と出会えたということがすごく重要なんだと思います。だからね、曲をようやく作り終えて、「ああ、終わったー」ってスタジオのドアを開けたら、ちょうど夕焼けの美しい所に出くわしたりするとね「おお、なんて素晴らしい出会いなんだ」と思うんですよ。

そうやって写真を撮ることで、作曲活動に何か影響することはありますか？

僕の作曲の方法は、大体1枚の写真や絵がイメージとして頭の中に出てくるんです。それに合った音をさがして行くという作業をするんですよ。だから、写真というのは僕にとってはすごく重要なツールになっているんです。ゆくゆくはね、僕の撮った写真をスライドかなにかで追って行きながら演奏をしてもいいな、なんて思いますね。



2004年コロラドに冬が訪れた。紅葉で色づいた木々を撮影

四国遍路八十八ヶ所、空海の旅、鐘の音を通して平和を願う

2005年2月にはコンセプトアルバム「空海の旅2」が発売になるそうですね。

2003年に出した「空海の旅」の第2弾になります。四国遍路八十八ヶ所を回って全てのお寺の鐘の音を録音して、その音色を使って楽曲を作ろうというコンセプトでね、「空海の旅2」では13番札所から23番札所までの鐘の音を入れた作品なんです。

このアルバムを作ろうと思ったきっかけはなんだったのでしょうか？

もともとNHKの番組で四国遍路八十八ヶ所扱った番組があってそのテーマ曲を書いたことがあったんですよ。素材との出会いはその番組だったんですが、2001年の9月11日に同時多発テロが起こりましたよね。そのときはアメリカに行く途中で、ハワイで5日間足止めにあっただんです。そのときに、僕は音楽家として、平和な世の中になるためになにができるだろうと考えていたら、この企画が出てきました。鐘の音というのは「1/fゆらぎ」という、心を静める、人間にとって心地よいリズムの成分が含まれているんですよ。その鐘の音と僕の音楽を一緒にしたら、なにか伝わるんじゃないかと思ったんです。

八十八ヶ所を回るだけでなく、鐘の音を録音していくというのはなかなか苦勞もおありだと思いますが。

はい、それはもう大変なことですよ.....僕はまだ46番札所、半分しか回ってないんですが、これからさらに大変になるでしょうね。松山市内に入ってくるので、街中ですからさらに鐘の音の録音が困難になるんですよ。

大きな通りの横などでは、車の音だとか雑音が入ってしまったり？



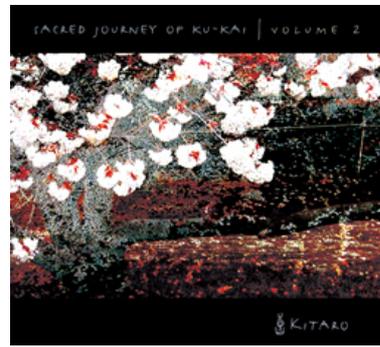
そうですね。本当にピュアな鐘の音を撮りたいので冬の時期に、早朝とか夜中とか、人が少ないところを狙って行かないといけなくて。冬の寒さの中を苦勞して録音しに行くわけですよ、そうするとどこからかパトカーがやってきて聞かれるんです、「君たちは何をしとるのかね」と（笑）。お寺さんには断ってあるんですけど、巡回をしているパトカーには怪しい人に見えるんでしょうね。

そういった苦勞を重ねながら、さらにお遍路を続けていくんですね。

そうですね。八十八ヶ所、全ての曲を作るまで続けます。お寺1ヶ所に1曲ずつ曲をつけていくということだけでも、このペースでいくとあと10年はかかるのではないかなと思うんです。その頃、ちょうど僕は60歳ぐらいになるんです。

では、最後は赤いちゃんちゃんこを着て.....

88曲目をそれ着て終わるっていうのもなかなかいいかもね（笑）。制作に10年以上かかるなんて、少し気の長い話だとは思いますがどね、でもこれもきつと出会い。やっぱり出会いなんだと思うんですよ。だから大変でも、一生懸命作り続けたいですね。



「空海の旅2」（コロンビア／2005年2月23日発売）

四国八十八ヶ所の鐘の音を使用し音楽を作る

“空海の旅プロジェクト”の第2弾アルバム。

13番札所から23番札所までの鐘の音を使用した全11曲が収められている。荘厳な鐘の音とともに美しく奏でられた喜多郎サウンドには、世界の平和と人々の安らぎへの強い願いが込められている。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.